

STROKE 2016



Congress Preview

プレ特集号

人口 転換 と 脳 卒 中

Population
Transition
and Stroke

会期 2016/4/14(木)~16(土)

会場 ロイトン札幌/さっぽろ芸術文化の館/札幌市教育文化会館

<http://stroke2016.umin.jp/>

STROKE
2016
in Sapporo

STROKE2016は、第41回日本脳卒中学会総会の寶金清博会長、第45回日本脳卒中の外科学会学術集会の伊達勲会長、第32回スパズム・シンポジウムの糟谷英俊会長による企画の下、北海道札幌市を舞台に、4月14日(木)~16日(土)の日程で開催される。今年度は、全体のテーマを「人口転換と脳卒中—Population Transition and Stroke」と設定し、高齢化と向き合う関連学会の協力を得て、幅広い視点で脳卒中医療を学ぶ機会が提供される。本特集では、STROKE2016の企画の狙いや見どころについて紹介する。

第41回日本脳卒中学会総会
会長 寶金 清博
北海道大学大学院医学研究科 脳神経外科

第45回日本脳卒中の外科学会学術集会
会長 伊達 勲
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 脳神経外科

第32回スパズム・シンポジウム
会長 糟谷 英俊
東京女子医科大学東医療センター 脳神経外科



CONTENTS

会長に聞く	2・3
特別企画紹介	4
注目海外演者の横顔	4
注目セッション	5
合同会員情報交換会・ 公式モバイルアプリ情報	5
STROKE2016によせて	6
札幌を訪れる先生方のために	6

ロイトン札幌

さっぽろ芸術文化の館

札幌市教育文化会館





テーマの狙い

—はじめに、全体のテーマを「人口転換と脳卒中—Population Transition and Stroke—」とした狙いをお聞かせください。

寶金 わが国では少子化と高齢化によって「人口転換」が引き起こされ、それが予想もできなかった速さで進行しています。団塊の世代が2025年ごろまでに後期高齢者(75歳以上)に達することで、介護・医療費等社会保障費の急増が懸念される2025年問題が目の前に迫っている状況を踏まえると、時宜を得たテーマではないかと思えます。今回は高齢化と向き合う関連学会の協力を得て、脳卒中の超急性期はもちろん、慢性期の治療、予防と先制医療、機能再生、さらには介護医療制度などの公共政策についても十分に議論する場を設けています。脳卒中医療を担うものが今後、超高齢社会の中で目指すべき方向を見出し、出口を模索する端緒にしたいと考えています。

—日本脳卒中の外科学会やスパズム・シンポジウムでは、個別テーマをどのように設定したのでしょうか。

伊達 日本脳卒中の外科学会では、全体テーマで強調されている「年齢」に着目し、個別テーマを「年齢を考慮した脳血管外科」としました。外科治療の結果を大きく左右する要素の1つが年齢です。議論の中心はやはり高齢者に関するものとなりますが、小児においても年齢を考慮した対応が求められます。高齢者の未破裂脳動脈瘤や周術期管理に加えて、小児の脳血管障害の話題もシンポジウムで取り上げます。

糟谷 「人口転換」で私の頭に浮かんだのは、年齢とスパズムの関係です。これに関して多くの研究が行われているもののいまだ結論は得られていません。ここで決着の道筋を示し、今後の診療に役立てるためにも、スパズム・シンポジウムでは「スパズムに年齢因子は関与するか？」をテーマに選び、同テーマのシンポジウムも企画しています。

超急性期から 公共政策まで議論



第41回日本脳卒中学会総会
会長 寶金 清博氏



STROKE 2016

会長に聞く

合同開催の意義

—STROKEとして3つの学会を合同開催する意義や期待についてご説明ください。

寶金 平成10年に初めて合同開催の形を取って以来、STROKEは徐々に変化してきました。当初の内科医と外科医だけでなく、基礎研究に従事している研究者、看護師や理学療法士、作業療法士も参加するなど裾野が広がっており、現在では脳卒中診療に関わる多職種が顔を合わせて意思疎通を図り、それぞれがどのような仕事をしているのか、情報を共有する絶好の場となりました。基礎から臨床、公共政策に至るまで、幅広いテーマが設定されている点も大きな魅力です。

伊達 外科系だけの大会では、どうしても手術の技術面に話題が集中しがちです。合同開催によって、われわれ外科医が最先端の治療やガイドラインについて内科的側面の細部を学ぶことができるのは大きな長所です。

糟谷 今、脳卒中診療ではチーム医療の推進がより強く求められています。内科医や外科医だけでなく看護師やほかのメディカルスタッフがこの大会に参加し、モチベーションを上げるきっかけにしてほしいと思います。実際、看護師からの演題応募が多数あったことは喜ばしい限りです。また、今後は介護職の方の参加も望まれます。患者さんが要介護状態になる過程や実際の治療を学ぶことは、日々のケアの充実につながるでしょう。

寶金 その意味で、会場の割り当てなどを今回は特に意識してプログラムを組みました。各学会の垣根を越えるべく、合同学会の利点を最大限に活かせるよう工夫しておりますので、少しでも他科への理解を深めるとともに、診療科や職種を越えて積極的にコミュニケーションを図ってほしいですね。

他職種が参加し モチベーション向上に 期待



第32回スパズム・シンポジウム
会長 糟谷 英俊氏



STROKE2016の見どころ

— 卒・外合同シンポジウムでは、どのような内容を予定されていますか。

實金 急性期脳虚血の治療戦略がこの1~2年でドラスティックに変化しました。それを牽引する機械的血栓除去術とt-PA療法の組み合わせなどについて議論する『急性期血行再開通療法—Honolulu, Nashvilleの先へ』にまず注目していただきたいと思います。また、急性期治療の進歩により、虚血脳に対する経時的な損傷を最小限にする、つまり脳保護の重要性がますます増してきました。『脳保護療法の新展開』は日ごろ、われわれ外科医が接する機会が限られる基礎的な話題も多く盛り込まれています。その他、脳卒中を未病の段階から予防する先制医療についての『脳卒中先制医療—脳ドック、無症候性疾患治療、遺伝子診断』はこれから成熟が期待される分野ですので、STROKE2016を議論の契機としていただき、今後の成長を見守りたいと考えています。

— 他学会との合同シンポジウムについてはいかがでしょうか。

伊達 私がまず勧めたいのは、日本脳神経血管内

治療学会との合同シンポジウム『脳卒中内科医、脳卒中外科医に必要な脳血管内治療のトピックス』です。日本脳神経血管内治療学会とSTROKE全体との合同シンポジウム形式はおそらく初めてですが、脳血管内治療は今特に注目されていますので、脳血管内治療をご自身では直接行う機会がない内科医と外科医の先生方に聞いてほしいシンポジウムです。

— その他にも目を引くセッションが盛りたくさんですが、いくつかご紹介ください。

實金 昨年、脳卒中治療ガイドラインが6年ぶりに改訂されました。これを受け、教育講演において小川彰先生(岩手医科大学)をはじめ、改訂委員を務められた先生方を中心に変更点などを解説していただきます。こちらもタイムリーな企画なので注目してください。

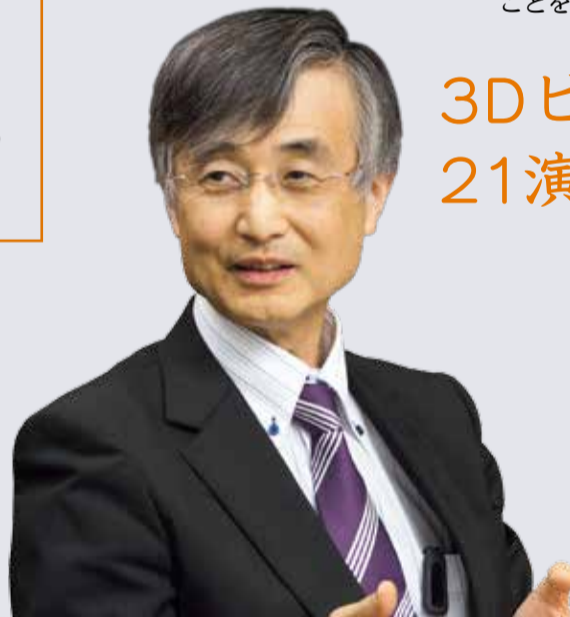
伊達 外科学会としては、3Dビデオセッションを挙げたいと思います。手術手技習得を学ぶビデオシンポジウムは人気が高いのですが、今年は特に若手脳神経外科医のための3Dビデオセッションを充実させました。初日に3セッションを設け、1セッション7人、計21人の演者が基本的なクリ

ッピング術や脳動静脈奇形(AVM)摘出術、頸動脈内膜剥離術(CEA)、バイパス術などの講演を予定しています。これほど充実した3DビデオセッションはSTROKEでは初めてであり、『3D元年』となるよう準備をしています。3Dビデオは技術習得に大きく寄与しますが、各施設でもまだ充実していないのが現状であり、多くの方々の来場が期待されます。

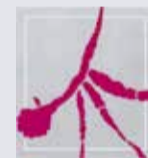
— スパズム・シンポジウムでは、どのようなセッションに注目すべきでしょうか。

糟谷 伊達先生が注目演題として脳血管内治療に関する合同シンポジウムを挙げられましたが、われわれが最も注目してほしいのもこの脳血管内治療に関する話題です。スパズム・シンポジウムでは、過去1年間に発表されたスパズム関連の文献を基礎と臨床に分け、2人の演者がレビューするセッションを設けています。昨年、私が臨床論文のレビューを行った際、スパズムの治療として脳血管内治療が世界のトレンドになっていることが分かりました。この脳血管内治療の先駆けとなったのは、わが国の郭泰彦先生(朝日大学歯学部附属村上記念病院)であり、郭先生もお招きした『スパズムが起こった時のレスキュー治療』と題したシンポジウムを企画しています。脳血管内治療は、用いられる手技・薬剤とも保険適用されておらず、保険収載に向けたムーブメントにつながることを期待しています。

チーム医療の重要性が高まっていることを受け、今回はこれまで以上に各学会間の垣根を取り払い、診療科や職種を越えた議論が交わされるよう工夫がなされている。そこで、各学会の会長にSTROKE2016への思いや見どころなどについて伺った。



3Dビデオセッションは21演題



第45回日本脳卒中の外科学会学術集会
会長 伊達 勲氏

各会長より一言

— 最後に、来場者に向けてメッセージをお願いします。

實金 脳卒中診療に携わる多職種の方々が一堂に会する年に一度の大交流会でもあるので、できるだけ多くの方に参加していただきたいと思います。学術的にも、みなさまのご期待に応えるだけの内容を取りそろえていると自負しています。4月の札幌はまだ肌寒さが残りますが、3大学合同で温かくお迎えしますので、早春の札幌にぜひ足をお運びください。

糟谷 スパズムに対する世界のスタンダード治療を学んでください。また、この10年新薬は上市されていませんが、欧米で行われている治験の中間報告をDaniel Hänggi氏に行っていたことができますので、この機会に日本でも導入される可能性のある新薬の最新知見に触れてほしいと思います。

伊達 先ほど触れた3Dビデオセッションはもちろんのこと、特別講演として未破裂脳動脈瘤の

治療で名高いSeppo Juvela氏など、3名の海外演者にお越しいただくので、こちらにもご注目ください。今回は、實金先生が決められたテーマに対し、糟谷先生とともにわれわれ2つの外科学会がうまく追従できているのではないかと思います。3学会が融合しつつも、それぞれの特徴が出たSTROKE2016になるとと思いますので、ご期待ください。

— 先生方、本日はありがとうございました。

特別企画紹介

特別企画Ⅰ 老化のScience

日時 4月14日(木) 15:00-17:00
 場所 B会場(さっぽろ芸術文化の館3F 黎明の間)
 座長 下濱 俊(札幌医科大学), 山口 修平(島根大学)
 演者 井藤 英喜(東京都健康長寿医療センター)
 石井 直明(東海大学), 樋口 京一(信州大学)

特別企画Ⅱ 認知症研究の最前線

日時 4月15日(金) 13:50-15:50
 場所 B会場(さっぽろ芸術文化の館3F 黎明の間)
 座長 富本 秀和(三重大学), 中島 健二(鳥取大学)
 演者 鈴木 利治(北海道大学)
 猪原 匡史(国立循環器病研究センター)
 樋口 真人(放射線医学総合研究所), 里 直行(大阪大学)

特別企画Ⅲ 透明性ガイドラインとCOI

日時 4月16日(土) 11:00-12:20
 場所 F会場(ロイトン札幌2F リージェントホール)
 座長 寶金 清博(北海道大学), 伊達 勲(岡山大学)
 演者 花輪 正明(日本製薬工業協会), 佐藤 典宏(北海道大学)
 宮本 享(京都大学)

特別企画Ⅳ 脳卒中学会・AMED合同シンポジウム 脳卒中研究の展望

日時 4月16日(土) 13:50-15:10
 場所 F会場(ロイトン札幌2F リージェントホール)
 座長 嘉山 孝正(山形大学)
 峰松 一夫(国立循環器病研究センター)
 演者 末松 誠(日本医療研究開発機構)
 鈴木 則宏(慶應義塾大学), 寶金 清博(北海道大学)

特別企画Ⅴ 高齢化社会と公共政策

日時 4月16日(土) 15:10-17:00
 場所 F会場(ロイトン札幌2F リージェントホール)
 座長 山口 武典(国立循環器病研究センター)
 小川 彰(岩手医科大学)
 演者 松本 晴樹(厚生労働省), 加藤 久和(明治大学)
 石井 吉春(北海道大学), 中田 力(University of California)

注目海外演者の横顔

Werner Hacke 氏

言うまでもなく、世界脳卒中機構(World Stroke Organization, WSO)の代表者の1人であり、世界の脳卒中のリーダーである。何度か来日されているが、今回もご本人の強い意向でご講演を拝聴する機会が得られた。今後の世界の脳卒中医療へのビジョンを語ってもらう。

(寶金清博氏)

招待講演4

[Update on mechanical thrombectomy-update, status and implementation]

4月15日(金) | 10:10-10:50 | A会場

Gregory YH Lip 氏

心房細動を原因とする心原性脳塞栓症の権威であり、日本でも臨床指標として使用されているCHA₂DS₂-VAScスコアやHAS-BLEDスコアの創案者である。非弁膜症性心房細動に対するNOAC治療の現在と将来を語るべき第一人者として、招待講演、スポンサーセミナーでの講演は必聴である。

(寶金清博氏)

招待講演6

[Atrial fibrillation and stroke: Risk assessment and the changing landscape of thromboprophylaxis]
 4月15日(金) | 8:30-9:00 | E会場
 スポンサーセミナー3
 4月15日(金) | 15:50-16:50 | B会場

Anne L. Abbott 氏

著名なGA Donnan教授と共に、頸動脈狭窄に関し、多彩な視点から臨床的に重要な論文を多数発表している新進気鋭の女性研究者である。今回は、頸動脈狭窄に対する最先端の研究結果を発表してもらう。頸動脈病変についての新しい視点を学ぶまたとない機会となるであろう。

(寶金清博氏)

招待講演7

[Optimising Outcomes in Patients with Carotid Stenosis: Where are We Up To?]

4月16日(土) | 10:00-10:30 | A会場

Peter Nakaji 氏

脳動静脈奇形と硬膜動静脈瘻について、最先端の生物学的あるいは遺伝子解析とその理解に基づく治療法を紹介。最近、個々の症例にこれらの分析を行うことが重要視され、顕微鏡的分析だけでなく電子顕微鏡的分析も行われるなど、新しい治療法への道を拓くものと期待される。

(伊達勲氏)

特別講演3

[Current Concepts of the Physiology and Biology of Brain Arteriovenous Malformations and Dural Arteriovenous Fistulae]

4月15日(金) | 11:00-11:50 | D会場

Daniel Hänggi 氏

Hänggi氏は、スパズムを予防するには、新しいdrug delivery systemの開発が必要だという考えを持って研究している。今回は、米国のベンチャー企業が開発したEG-1962(nimodipine microparticles)について最新の治験の話をしてもらう。久しぶりのスパズムの予防薬として注目されている。

(榎谷英俊氏)

特別講演

[NEWTON: Nimodipine microparticles to Enhance recovery While reducing Toxicity after subarachnoid hemorrhage]

4月14日(木) | 14:10-14:50 | G会場

日本を代表する加齢の研究者が登場

特別企画Ⅰ

今大会では、脳卒中の最大の危険因子である「加齢・老化」について、3日間連続で特別企画Ⅰ、特別企画Ⅱ、特別企画Ⅴが開催される。脳卒中の背景にある「加齢・老化」に関して、基礎から臨床、そして公共政策の在り方まで学ぶ3日間の連続講義の第一弾が、初日の「老化のScience」である。ここでは、「老化」の基礎科学の最先端におられる3名の先生にご講演いただ

く。老化のメカニズム・動物モデルを用いた分子生物学的Frontierや、その表現型であるフレイル・サルコペニア・認知症などを理解する絶好の機会であり、井藤先生(東京都健康長寿医療センター)、石井先生(東海大学)、さらに樋口先生(信州大学)という日本を代表する先生方の加齢研究の一端に触れる機会になるものと期待される。

(寶金清博氏)

脳卒中と認知症の新しい関係性に注目

特別企画Ⅱ

高齢化が進む先進諸国で著しく増加している認知症は、今後、東アジアを中心に世界的に波及するものと予想され、その予防と治療が喫緊の課題である。現在、アルツハイマー病に対する治療介入のためのADNI・DIANの両研究、認知症創薬基盤の整備を目的とした大規模レジストリーの構築が展開され、創薬に向けたシーズの探索が急がれている。

本シンポジウムでは、認知症研究の最前線に焦点を絞り、特にアミロイドβの産生およびクリアランス機構、タウ病理の視点からアルツハ

イマー病に対する創薬の現状を明らかにしたい。アルツハイマー病における血管因子やアミロイド血管症の関与、脳卒中前認知症(pre-stroke dementia)の問題から理解されるように、脳微小循環は認知症と密接な関係にある。その点で、国民病である脳卒中の制圧を目的とする本学会が、認知症研究を視野に入れて正面から取り上げる意義は大きく、本シンポジウムが脳卒中と認知症の新しい関係性に光を当てる機会となることを期待している。

(座長：三重大学 富本秀和氏)

行政から人口学まで4つの視点で考察

特別企画Ⅴ

本邦は、周知のように諸外国を引き離しての高齢化率首位を独走している。それは、経済活動規模の恒常的な増大(パイの持続的な拡大)による高度成長・富国を国是としてきたこの国にとって、「不都合な真実」である。

「高齢化」は、医療者が誇るべき輝かしい成果である。「寿命の延伸」は、疑う余地のない正義であった。「超高齢社会」の成立は現代医学の最大の成果であるが、それによってもたらされた陰の部分に対して、われわれには、「超高齢社

会」を成立させた責任者として、英知を集めて現場からの提言と具体的なビジョンを提示する責務がある。

高齢化社会という不都合な真実に対して、①行政の視点(厚労省の松本氏)、②人口学からの視点(明治大学の加藤先生)、③公共政策学からの視点(北海道大学の石井先生)、④医師の視点(University of Californiaの中田先生) — という4つの異なる視点から考える特別企画が学会の掉尾を飾る。

(寶金清博氏)

注目セッション

日本脳卒中学会・日本脳卒中の外科学会 2学会合同

合同シンポジウム1

急性期血行再開通療法 —Honolulu, Nashvilleの先へ

14日 | 9:10-10:50 | A会場(さっぽろ芸術文化の館)

2013年2月のHonolulu Shockから2015年2月のNashville Hopeへの劇的展開は、急性期脳梗塞の治療に携わる医師と社会に大きなインパクトを与えた。既にこの1年、まず有効性を示した条件を満たす患者の転帰を改善すべく、onset to reperfusionを短縮する試みが多く、施設で展開された。しかし総合脳卒中センターの整備、血管内再開通療法を全ての患者に提供する超急性期脳卒中の搬送体制確立までの道りは遠い。本シンポジウムでは、Nashville Hopeの先に何かがあるのか、t-PA静注療法、血管内再開通療法の今後の目標と取り組みを取り上げる。

(座長：神戸市立医療センター中央市民病院 坂井信幸氏)

日本脳卒中の外科学会

シンポジウム1

年齢を考慮した未破裂脳動脈瘤の外科治療

14日 | 10:00-11:40 | D会場(ロイトン札幌)

シンポジウム5

年齢を考慮した脳血管外科： 周術期管理に関連して

16日 | 8:30-10:10 | D会場(ロイトン札幌)

当学会のテーマ「年齢を考慮した脳血管外科」に関連し、2つのシンポジウムを企画した。シンポジウム1では、自然歴や破裂のリスク解析、クリッピングおよびコイル塞栓術などの話題を取り上げ、増加する高齢者の未破裂脳動脈瘤を考察。シンポジウム5では、高齢者における頸動脈狭窄症への対処、くも膜下出血の管理、慢性腎疾患の話題、および小児の周術期管理で重要なまよみや病を取り上げ、手術と適切な周術期管理が良好な治療結果をもたらすことを再認識する。

(伊達勲氏)

日本脳卒中学会

シンポジウム5

脳梗塞細胞療法—現在と展望

15日 | 16:20-17:50 | A会場(さっぽろ芸術文化の館)

本シンポジウムでは、現在策定中の「脳梗塞の細胞治療に関する開発ガイドライン」を視野に入れて、今後わが国でも本格化されるであろう脳梗塞細胞療法の最先端を行くエキスパートを招き、その現状と課題について大いに議論する。また、本シンポジウムの前には、米国におけるこの分野の第一人者であるSean I. Savitz氏(University of Texas Medical School)による基調講演2も用意されている。同氏からは米国における細胞療法の考え方や現状について分かりやすく解説してもらう予定であり、この基調講演と本シンポジウムの両方を聴講し、より理解を深めてほしい。

(座長：富山大学 黒田敏氏)

シンポジウム14

ICT, Telemedicineと脳卒中

16日 | 13:50-15:20 | E会場(ロイトン札幌)

急性期脳卒中患者の救命には、1分でも早く、安全に治療を開始すべきであり、そのためには「市民啓発」「救急隊による迅速・適切な搬送」「脳卒中センターの受け入れ体制の構築」が重要となる。本シンポジウムでは、ICTを活用した先進的な取り組みについて、ソフトおよびハードウェア開発の視点から情報を発信する。また、脳卒中治療ガイドライン2015で新たに記載された地域連携、遠隔医療システムに関する推奨と限界についても討議する。急性期脳卒中診療の地域間、病院間の格差が是正され、脳卒中の制圧に向けた大きな一歩を踏み出せるような議論を期待したい。

(座長：東京慈恵会医科大学 井口保之氏)

スパズム・シンポジウム

シンポジウム2

高齢者くも膜下出血患者の 治療と限界

14日 | 17:30-18:10 | G会場(ロイトン札幌)

スポンサーシンポジウムの「スパズムに年齢因子は関与するか？」や「スパズムが起こった時のレスキュー治療」といったセッションに加えて、ぜひ注目してほしいのが本シンポジウムである。くも膜下出血は、年齢に関係なく発症しうるが、その転帰は重症度だけでなく発症時の年齢にも大きく左右される。したがって、高齢者が発症した場合、若年者と比べて著しく転帰不良となり、自立可能な割合が低く、死亡率は上昇する。超高齢社会を迎えたわが国では、どの施設も高齢者のくも膜下出血患者の対応に苦慮しており、治療の方向性を検討していきたい。

(横谷英俊氏)

合同会員情報交換会

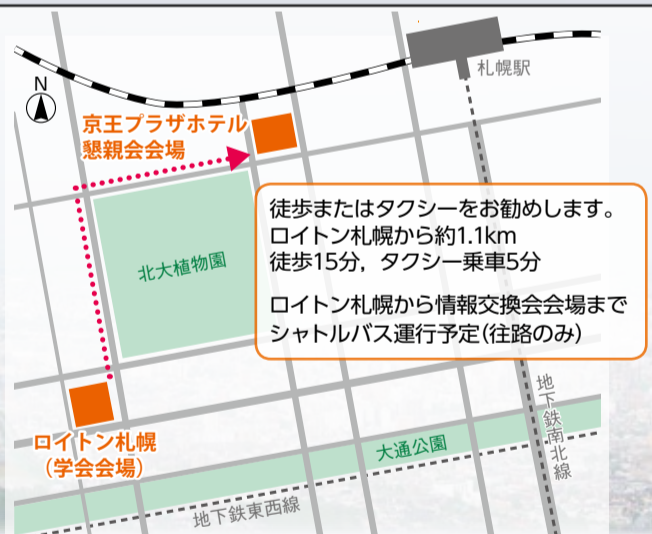
今回は開催地の北海道の食材に加え、岡山県名産の地酒や果物なども準備しています。また、「岡山」と「脳神経外科」にゆかりの方々による弦楽四重奏も予定しておりますので、ぜひお越し下さい。

(STROKE2016事務局一同)

日時 4月15日(金) 19:30-21:00

会場 京王プラザホテル札幌2階
「エミネンスホール」

参加費 2,000円



プログラム検索 & スケジュール登録システム 公式モバイルアプリ My Scheduleのご案内

本大会では、参加者サービスの1つとして演題検索やスケジュール登録ができるモバイルアプリ My Scheduleサービスをご利用いただけます。

App Store, Google Play にて公開
アプリ名：Stroke2016
利用料：無料
対応機種：iPhone, iPad, Android

4月上旬
公開予定



一般社団法人日本脳卒中学会 理事長
鈴木 則宏氏 (慶應義塾大学)



出口を見いだす契機に

脳卒中は、わが国の死亡原因の第4位であるが、65歳以上の寝たきり原因の第1位を占める。発症率は欧米に比べて著しく高く、今後患者の増加も予想され、言わば日本人の国民病である。脳卒中医療とは脳卒中の発症を抑制、または発症後の予後を最良の状況にすることであり、予防から救急医療、急性期治療、回復期治療、リハビリテーション、在宅介護など、診療科や施設を越えた包括的医療体系の確立が望まれる。このような状況の中で、日本脳卒中学会は脳卒中診療に関わる各領域の協力により1975年に設立された。脳卒中とその関連疾患に関する基礎的および臨床的研究の奨励を行い、その進歩・発展を図るため、学術研究会、学術講演会の開催、学術誌の発行など、多岐にわたって活動を展開してきた。

現在の大きな課題は、脳卒中発症数に比べ脳卒中専門医の数が十分ではなく、しかも地域格差が大きいことである。国民病ともいふべき脳卒中に対して行政面での支持・援助が不十分であり、「脳卒中对策基本法あるいは循環器病対策基本法」の制定に向けてのさらなる努力が必要である。そこで、現在AMEDの協力の下で①日本脳卒中データベース(National Stroke

Database: NSD)構築事業の展開、②脳卒中を克服するための新規医療技術の開発、③脳卒中の病因病態解明に関する研究、④Information and Communication Technology (ICT)連携による包括的脳卒中医療の効率化に関する研究、⑤バイオバンク、およびヘルスケアデータの脳卒中予防への活用方法の研究、⑥次世代の脳卒中医療を担う人材の育成事業の展開一など、学会のプロジェクトとして展開しつつある。

STROKE2016は「人口転換と脳卒中—Population Transition and Stroke」がテーマとなる。「少子化」と「高齢化」という2つの現象の中で、皮肉なことに「高齢化」は医学と医療の進歩によりもたらされた。脳卒中の最大の危険因子が「加齢」であることを考えると、脳卒中医療を担うわれわれの責任は極めて大きい。今後、超高齢社会の中で目指すべき方向を議論し、出口を見いだす契機となることを期待したい。

一般社団法人日本脳卒中の外科学会 理事長
富永 悌二氏 (東北大学)



技術認定制度の導入について議論

脳卒中は、一般脳外科医が最もよく遭遇する疾患であり、その外科治療は脳外科医の長年にわたる研鑽と努力によって築き上げられてきた。しかし開頭による手術法はその大要がおおよそ確立され、また技術習得に時

間を要するため、現在開発途上にある脳卒中の血管内治療に比べて若手医師への求心力はやや低下している。日本脳卒中の外科学会では、このような若手医師にとっての技術習得の目標となり、また国民の負託に応えるべく技術認定制度の導入を検討している。STROKE2016では、現在進捗している日本脳卒中の外科学会の技術認定制度について紹介し、この制度が変革期にあるわが国の専門医制度の中でどのような立ち位置にあり、今後どのように在るべきか議論したい。

スバズム・シンポジウム 代表世話人
鈴木 倫保氏 (山口大学)



多角的な視点での研究の発展に期待

本会はStrokeの中で最も小規模だが、1985年から現在まで継続できたのは、太田富雄先生以来多くの臨床医・研究者が「脳血管攣縮」の病態解明や治療法開発に途切れなく情熱を捧げてきたからである。現在ではそのtriggerも、くも膜下出血そのものの他、付随する虚血・脳損傷、電気生理学的異常までを含み、主病変も主幹動脈～末梢循環まで大変多彩になっている。今年はagingが新たな対象となり、さらに研究が発展するものと期待している。

第41回日本脳卒中学会総会事務局監修

札幌を訪れる先生方のために

これだけは食べておきたい！
旬の海産物編

海産物では毛ガニ、ポタンエビ、ホタテなどがこの時期旬を迎えます。ポタンエビは主に噴火湾を中心とした北海道南部の太平洋産が旬となります。身は刺身や高級すしネタとして有名ですが、頭の部分をだしとして用いたみそ汁も試してほしいと思います。また、毛ガニはオホーツク海産のものが旬を迎えます。脂肪やグリコーゲンなどの栄養分を豊富に含むカニみそは、毛ガニが最もおいしいとされています。



その他、ウニやホタテ、アワビなどもこの時期お勧めです。

迷ったら
この店へ！

地元北海道の人が足しげく通う店に行ってみよう、という先生方のために、すすきの駅近辺のお勧めの店をご紹介します。

【はちきょう】北海道の海産物などの他、地酒を取りそろえている。人気店のため、予約した方が好ましい。
<http://www.hotpepper.jp/strJ000621955/>



【GARAKU】札幌スープカレーの店の代名詞。スープカレー好きには訪れてほしい名店。
<http://www.hotpepper.jp/strJ000697432/>



札幌ラーメンも有名ですが、お店が郊外に散在しているため、新千歳空港内にある北海道ラーメン道場などを利用すると効率良く回れます。またお土産についても、荷物を持って移動する必要がなく、豊富な種類があり、海産物の鮮度も落ちない、新千歳空港内での購入が便利です。

4月の札幌は
どんな気候？

4月の札幌はまだ寒く、日差しが強ければコートなしで歩けますが、寒気が舞い込めば雪がちらつきます。そのため、早朝や夜間は特に、コートや手袋、マフラーなどがあると重宝します。参考までに、気象庁の4月14～16日の過去3年間の平均気温を見ると、最低気温3.1度、最高気温は12.5度となっています。



※写真はイメージです。